

旧大乘院庭園の調査

—第374次

1 はじめに

平城宮跡発掘調査部では、本庭園を管理する(財)日本ナショナルトラストの委嘱を受け、復原整備に向けた資料を得るための発掘調査を、1995度より継続して実施している。東大池の西側の調査の結果、それまでの名勝指定地外へ遺構が続くことが判明し、2003年に追加指定がなされた。それに伴い、追加指定地上に建設されていたJR西日本の宿泊施設「大乘苑」が解体され、今年度から、「大乘苑」跡地の調査をおこなっている。

今回の調査地は、西小池中央部が推定される地区(北区)と、第365次調査で近世の岸の下層で平安時代とみられる遺構を部分的に確認した東大池西南隅部(南区)を対象とする(図149)。調査期間は2004年7月26日～10月29日、調査面積は、北区約510㎡、南区約170㎡、合計約680㎡である。

2 大乘院庭園と禅定院

大乘院は、一乗院とならび両門跡と呼ばれた興福寺の門跡寺院である。寛治元年(1087)に、興福寺の北方(現在の奈良県庁舎付近)におかれるが、治承4年(1180)平重衡の南都焼き討ちによって焼失し、その翌年に禅定院のあった現在地に移転した。一方、禅定院は、11世紀中頃に興福寺僧成源によりおこされた元興寺の子院であるが、大乘院を開いた隆禅が二代院主となり、以後、大乘院主は禅定院主を兼務しており、両院は密接な関係にあった。禅定院の伽藍については、三代院主頼実が永久年中(1113～1117)に堂舎を建立したことが知られる。

その後大乘院は、宝徳3年(1451)に徳政一揆で焼亡するが、当時の院主尋尊により、建物のみならず庭園も整備された。この時の作庭を担ったのは、足利義政にも重用された庭師の善阿弥であった。善阿弥によって改修された庭園は、改修を受けつつも江戸時代はじめまで続いたと考えられており、江戸時代の庭園の姿は『大乘院四季真景図』(以下『真景図』)などの絵図からうかがうことができる。

明治維新後、大乘院は廃絶、御殿の一部は個人宅とな

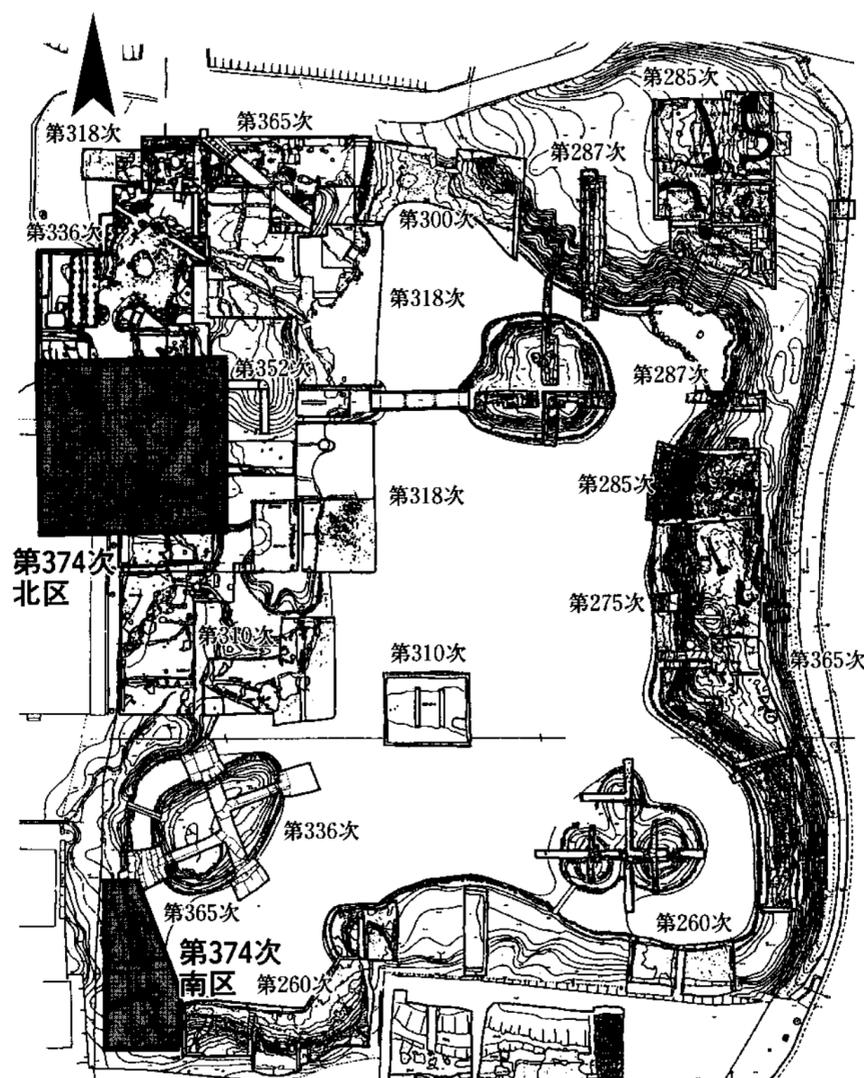


図149 第374次調査位置図

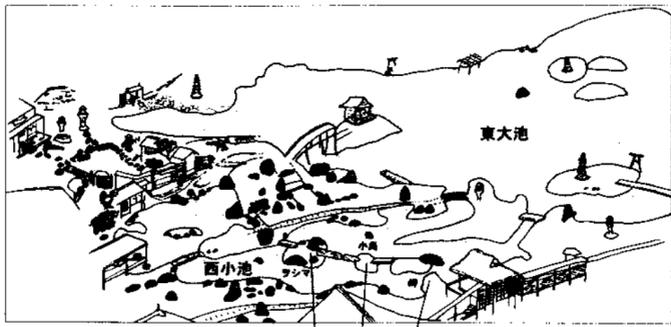
り、明治7年からは小学校として利用される。御殿が取り壊された後、明治16年に新たに飛鳥小学校が建設される。飛鳥小学校は明治33年に他所に移転し、一時期荒地となったが、明治42年に奈良ホテルが開業、大正時代には建設会社の倉庫が建設された時期もあった。昭和33年、前出の「大乘苑」が建設されたが、これも撤去され、現在に至る。

3 北区の調査

当調査部では、西小池の調査にあたり、『真景図』などの絵図を参考に、メシマを中心とする北側の池を「北池」、ヲシマから連りハシにより結ばれた小島群から西側を「中池」、それより東側および南側を「南池」と便宜的に呼び分けている(図150)。北区は、西小池中池南部および南池北部(西小池中央部)と、その西側の陸地部分を対象とする。調査区の北側は第336次調査区と接し、東部は第352次調査区と重複する(図151)。

基本層序

基本層序は以下のとおりである。表土、「大乘苑」の解体に伴う瓦礫層、「大乘苑」建設のための盛土層、戦後造られたテニスコートに伴う石炭殻層、灰褐色砂質粘土



※「大乗院四季良景園」(興福寺蔵)
及び「興福寺川大乗院庭園」
(『風景』第6巻第3号掲載)より作成

水の表現
■石の表現



図150 池の名称と絵図の対照

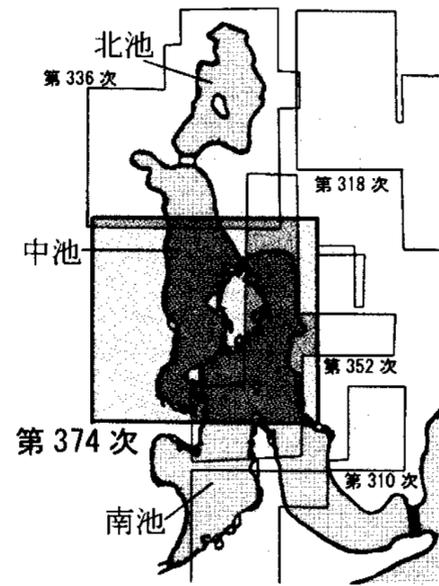
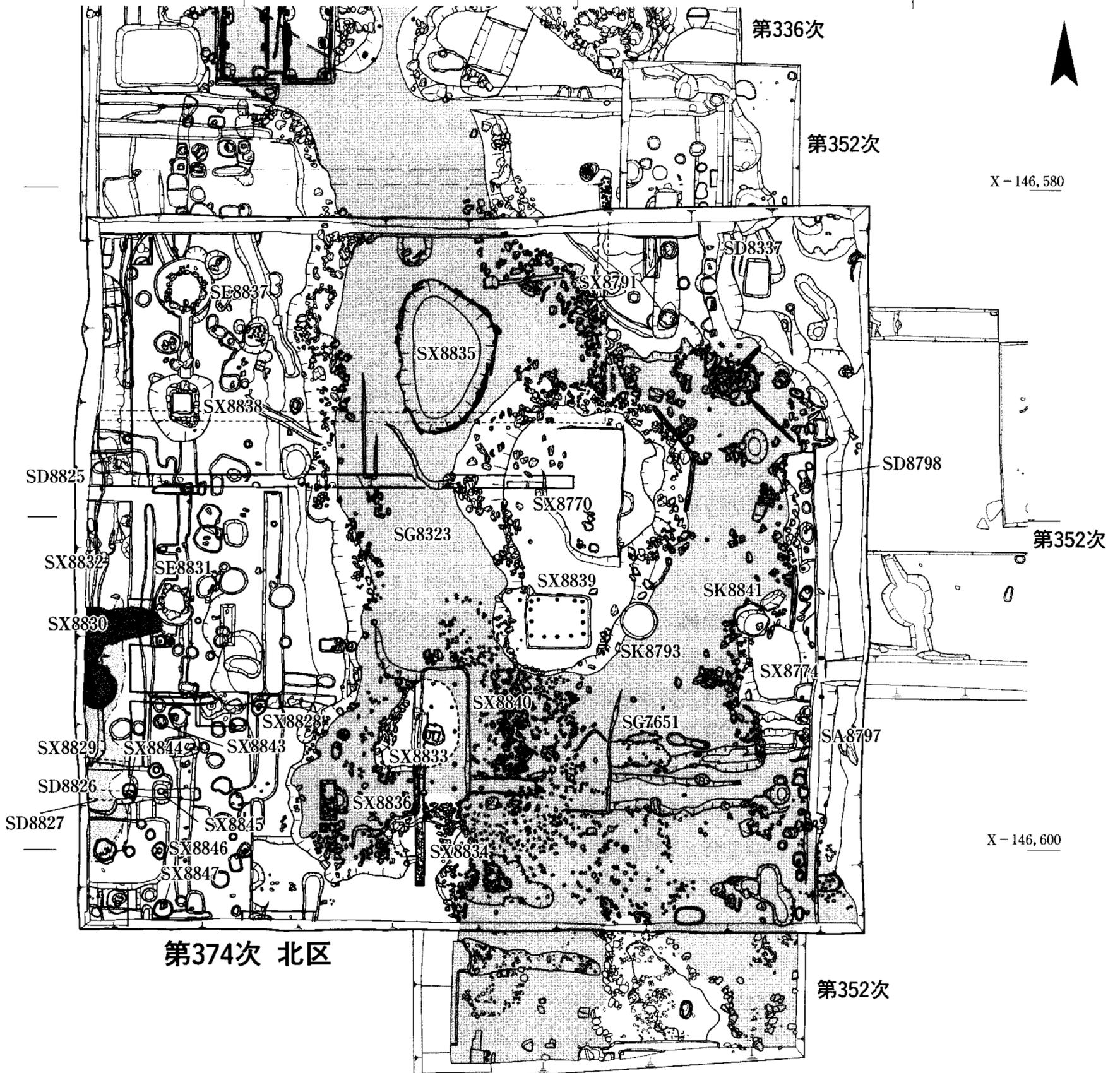


図151 西小池と調査区の位置関係



第374次 北区

Y-15,220

Y-15,200

図152 第374次調査 北区遺構平面図 1:200

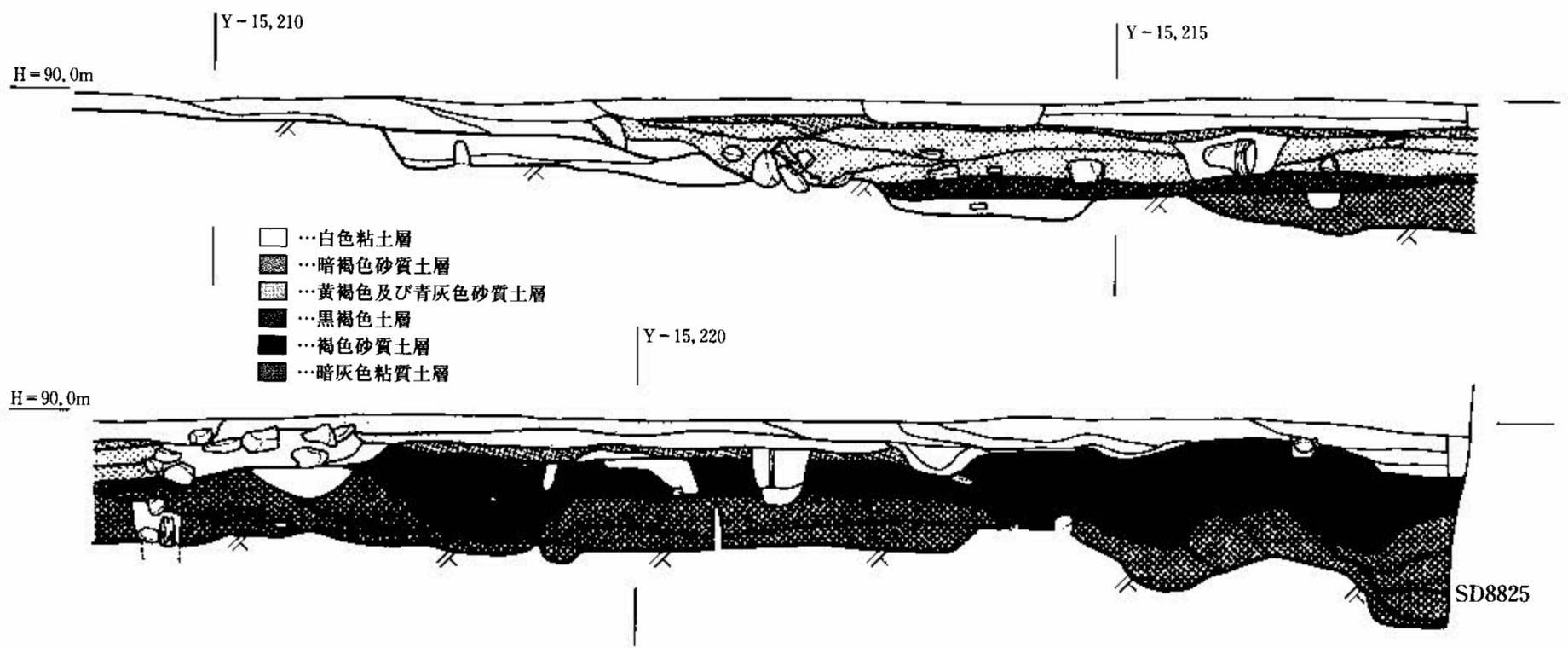


図153 北区中央東西畔北壁断面図 1:50

層、多量の瓦礫で盛土され、西側に土留めの南北石列(SX8848)を伴う白色粘土による整地層、飛鳥小学校建設時の整地層である暗褐色砂質土層となる。それより下層は、池の内部と西側陸地部分とで異なる。池内は青灰色砂質土または黄褐色砂質土による池埋立土、黒褐色の池内の堆積土、池底である地山となる。一方、池西側の陸地部分は、室町時代の土師器片を含む褐色砂質土層、瓦器片を含む暗灰色粘質土層、地山となる。

調査は、近代の建物遺構を検出した遺構面(灰褐色砂質粘土)で遺構検出、記録をおこない、徐々に掘り下げ、西小池の岸を確認した褐色砂質土上面を最終的な検出面とした。さらに、数箇所部分的な断割調査をおこない、下層の遺構を検出した。

西小池以前の遺構

検出した遺構は大きく、西小池以前の遺構、西小池およびこれに伴う遺構、西小池埋め立て後の遺構、に区分される。西小池以前の遺構は、池西側陸地部分の褐色砂質土上面、および断割調査で検出した遺構である。

褐色砂質土上面では、多数の小穴と数条の溝を検出した。『真景図』では、西小池の西側に御殿や塀などが描かれるが、今回の調査では、建物や塀の遺構としてまとまるものはなかった。礎板状の石を据える柱穴(SX8843~47)は、第365次調査で検出したSB8563の柱穴のありかたに類似し、江戸時代の遺構の可能性が高い。SB8563の柱穴と比較して著しく浅く、柱穴の基底部に近いこと、石組井戸SE8831の残存状況が良くないことなどを考え合わせると、西側陸地部分は、大きく削平を受けたものと考えられる。

南北溝SD8825 調査区西壁中央付近で検出した、地山を

掘り込む南北溝。西の調査区外へ落ち込み、東肩のみ確認した。溝の埋土は瓦器片を含み、溝底へ進むにつれ粘土質へと変化する。

東西溝SD8826 土器溜りSX8829を取り除いた面で検出した最大幅約2.9m、深さ約15cmの東西溝。灰褐色粗砂を埋土とする。

東西溝SD8827 土器溜りSX8829を取り除いた面で検出した幅約30cm、深さ約5cmの東西溝。SD8826を掘り込む。

石列SX8828(図154) 池西側陸地部分の断割調査で検出した。石は径60~80cm程度で、東西に7基、北側の面をそろえて並ぶ。最も西で検出した石の中央には、直径約20cm、深さ約20cmのホゾ穴がつけられている。

土器溜りSX8829(図155) 調査区西辺の断割調査において、褐色粘質土を取り除いた面で検出した。南北約8m、西



図154 石列SX8828(北東から)

は調査区外へと続く。鎌倉時代の土器が多数出土した。
磔敷遺構SX8830 黒色を基調とした10cm程度の磔を敷き詰めた遺構。南北幅は最大で約6m、最大の深さは40cmあり、西側は調査区外へとさらに落ち込んでいく。堆積土は粒子の粗い青灰色砂質土で、水の流れた形跡が認められる。重複関係から、石組井戸SE8831より古く、土器溜りSX8829よりも新しい(図156)。磔上面から室町時代の土器が出土した。

石組井戸SE8831 内径約60cm、深さ40cmの円形の石組井戸。石組の上面がそろっておらず、浅いことから、上半が破壊され、基底部のみが遺存しているものと考えられる。埋土から室町時代の土器が出土した。

石列SX8832 調査区西部中央付近、褐色土を取り除いた



図155 土器溜りSX8829 (北東から)



図156 石組井戸SF8831と磔敷遺構SX8830 (北東から)

面で検出した石列。南北に30~50cmの石を3基並べる。石の上面には室町時代の土師器がのる。

西小池およびこれに伴う遺構

西小池SG7651(南池)・SG8323(中池) 西小池中池南半および西小池南池北部を検出した。検出した池の東西岸間は約15mである。

南池北部は、第352次調査で池内と東岸造成状況を確認しているが、今回は東岸の汀線を確認した。東岸は、調査区北部で鍵の手に折れ南に伸び、第352次調査で検出した方形造りだしSX8774を形成し、南へと続く。

中池南部は、褐色砂質土を掘り込んで岸を造成し、池底部は地山を削り造成する。西岸の汀線は、北から緩やかな曲線を描いて南に延び、調査区南部で東に回りこんで舌状の岬SX8834を形成し、調査区外へと続く。岸は緩やかに立ち上がり、約15度の傾斜をもち、拳大から人頭大の割り石を中心とした護岸石を据える。

西小池中央部は、このほか池内に、後述するヲシマSX8770、小島SX8833、魚溜りSX8835などが設けられている。今回の調査区内での池底最深部の標高は89.4m前後、両岸に据えられた護岸の石や、ヲシマなどの高さより、水面高は89.7m付近と推定される。

池の堆積土内からは、江戸時代後期の土師器および陶磁器が出土した。

ヲシマSX8770 『真景図』に「ヲシマ」と記された、南北約9m、東西約5mの島。東半を検出した第352次調査とあわせて島の全体が判明した。島の頂部の標高は89.9m、半球状に地山を削り残し、さらに土を積み造成している。周囲に護岸石をめぐらし、一部に石が岩山状に集中するところが見られる。北および東岸では基底部に石や土を押さえるために長さ約1.7mの木材を多角形になるように並べる。

小島SX8833 ヲシマの南西に位置する島で、南北約2m、頂部の標高は現状で89.7m、東半はSX8840で破壊されている。ヲシマと異なり、地山上の淡灰褐色の土層の上に暗灰色粘質土の盛土をして造成する。島の周囲には護岸の石を据えている。

岬SX8834 西小池中池の南部で検出した舌状の岬。第352次調査で検出したSX8776に相当する。断割調査より、岬の整地土の下は5~10cm大の磔層となる。なお、『真景図』では、南池北岸、ヲシマ、小島、岬それぞれの間

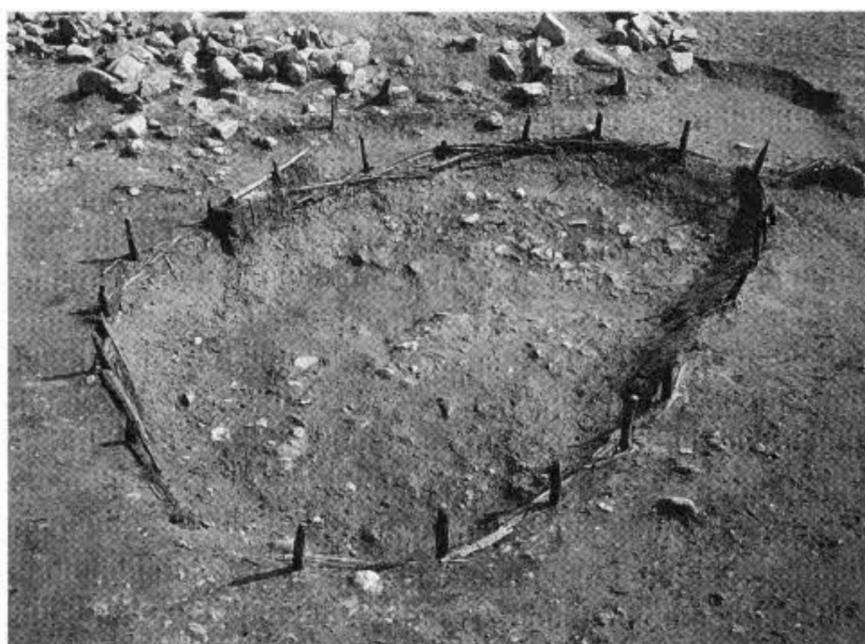


図157 魚溜りSX8835 (北西から)

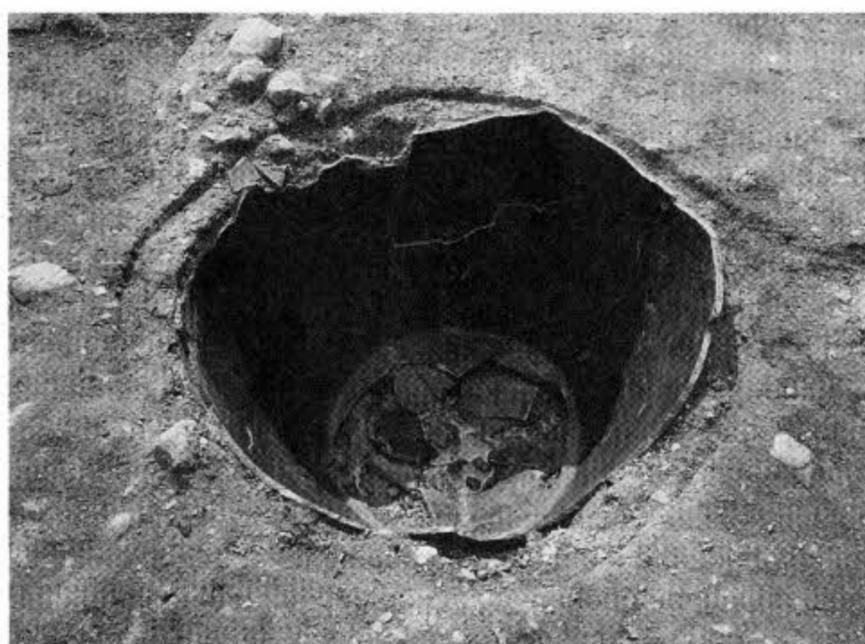


図158 埋甕遺構SX8836 (北から)

に、板状の石橋が描かれているが、今回はそれに相当する遺構や遺物は確認できなかった。

魚溜りSX8835 (図157) ヲシマの北西に位置する、池底を深さ0.3mに掘りくぼめた遺構。南北約4.5m、東西約3mの楕円形で、壁ぎわを22本の杭と竹のしがらみで護岸する。池の清掃時や避暑・避寒の際の魚の溜り場所で、植物の水底下の根茎部が多数出土したことから、水生植物の生育地を兼ねた可能性がある。

埋甕遺構SX8836 (図158) 西小池中池南部の池底に、口縁部を打ち欠いた、最大径70cmの瓦質の甕を埋め込む。

西小池埋め立て後の遺構

池の埋立土、飛鳥小学校建設に伴う整地土、灰褐色砂質粘土上面で検出した遺構。

南北溝SD8798 調査区の東端の南北溝。西小池東岸の立ち上がり掘り込む。北側はSD8337へつながり、南端は調査区外へ伸びる。

杭列SA8797 SD8798に沿って検出した南北方向の杭列。SD8798の埋土を掘り込み、調査区北側のSD8337内の杭列に続く。

石組井戸SE8837 調査区西北で検出した円形の石組井戸。内径約0.8m、石組の上端から約0.4mの位置で土坑SK8838とつながる土管を組み込む。井戸の深さは、80cmまで確認した。

水槽SX8838 SE8837の約3m南に位置する漆喰製の水槽を据えた遺構。水槽は50cm平方、深さ約70cmで、周囲を石・瓦・漆喰で固める。水槽の上端から20cmの位置に土管が固定され、SE8837から水が流れ込むように勾配が付けられている。SE8837とあわせて、浄水などの施設と思われる。なお、水槽の埋土からは、瓦・陶磁器のほかに、石筆・硯などの飛鳥小学校に関連する遺物が多数出土している。

SX8791 2基の甕を南北に配した埋甕遺構。甕内に石が落とし込まれていた。北側の甕のみ内部の石を取り上げて精査した。甕は直接地面に据えられ、口縁の周囲のみ漆喰で固められている。甕底部には、厚さ10cmほどに多量の鮑屑が詰め込まれ、その上面には墨書のある薄板、部材片などが投棄されていた。

SX8842 暗褐色砂質土層上面で検出した、屈曲部に黄漆喰製の枡を伴う土管暗渠列。

SX8839・SX8840 調査区中央で検出した水槽のコンクリート基礎。いずれも地山に木杭を数本打ち込んだ上に、コンクリートを流し込む。SX8839の内部には、レンガが多量に投棄されていた。

SK8793 セメント樽を埋め込む遺構。直径41.5cm、高さ64cm。SX8839、SK8841との間には板材が置かれていることから、一連の遺構と考えられる。

SX8336 第336次調査で検出した円礫を用いた建物基礎の南半部。L字に折れ曲がり、西は調査区外へ続く。

4 南区の調査

南区は、東大池西南隅部にあたる。第365次調査で近世末の池岸を検出した後、下層で礫敷とみられる状況を確認し、この礫敷が近世以前の池の遺構である可能性を指摘した。今回は、この礫敷面の広がり時期の特定を目的として、土層を詳細に観察し、かつ細かく分け面的に掘り下げて調査した。

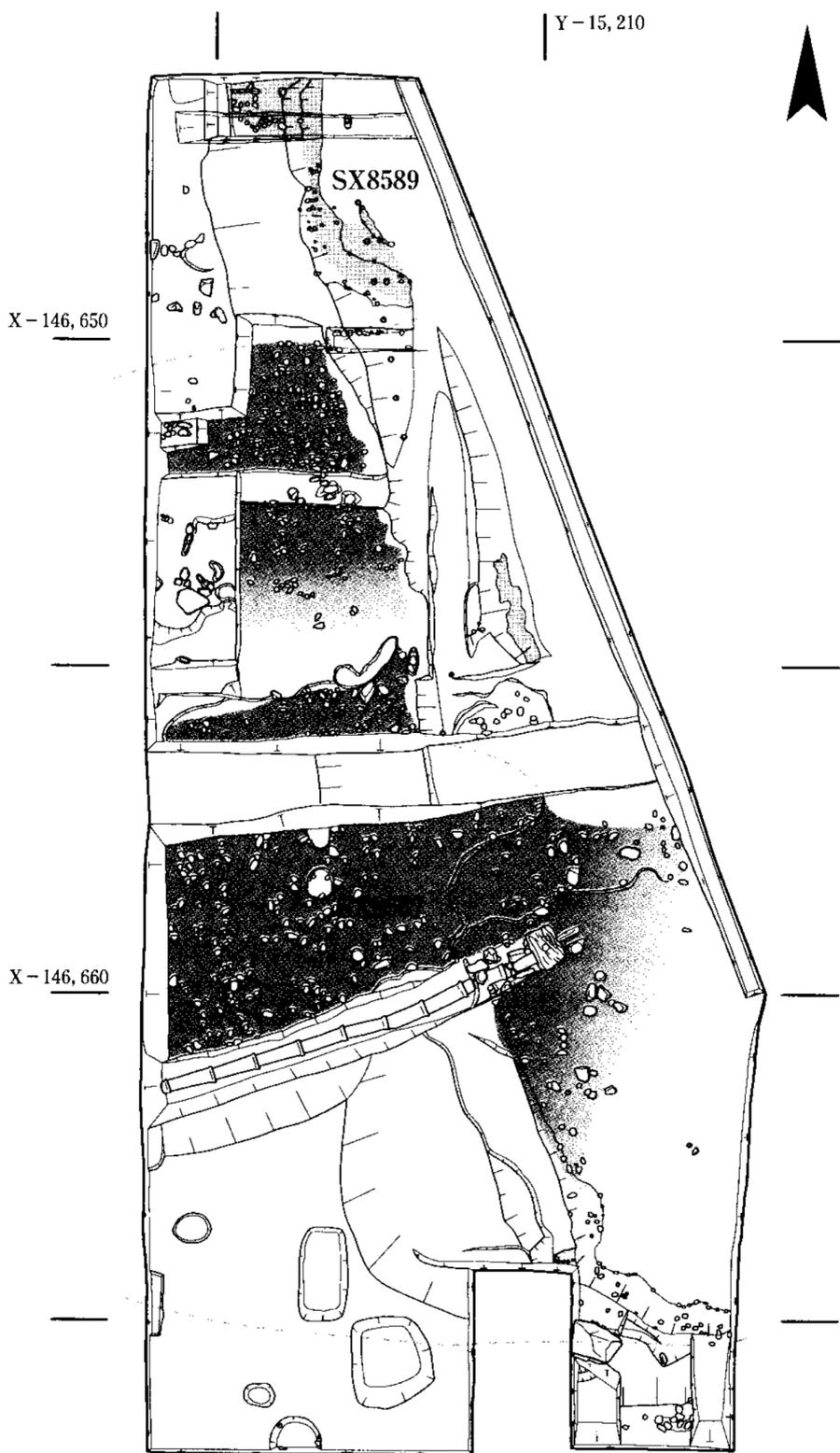


図159 第374次調査 南区遺構平面図 1:150

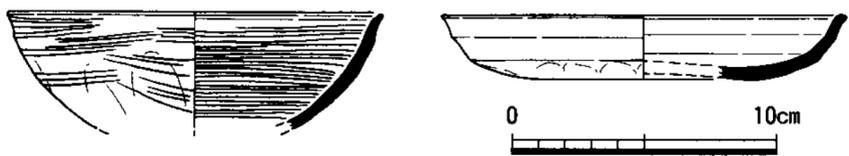


図160 礫敷間出土土器 1:4

基本的な土層は、第365次調査の通りである。また、近世の整地層より下の各層間では、包含する遺物に大きな時期差は認められず、いずれも12世紀前半を下限としている。

石列SX8851 近世の整地層を取り除いた面で検出した石列。池岸に直行する方向に、約30cmの石が3基並ぶ。石は南に面をそろえ、石の南側は約20cm低くなる。

礫敷SX8587 第365次調査で部分的に確認した礫敷面。今回は、範囲を広げ面的な調査を試みた。礫敷は、3～5cm程度の小石と、拳大ほどの石からなり、さらに西の調査区外へ延びる。12世紀前半を下限とする土師器、瓦

器片が礫敷中から出土した(図160)。礫敷は、中央畔やや北寄りの位置で段差をもち、北側が約10cm高い。この段を境として南北で状況を異にする。南半は、大ぶりの礫が密に敷かれ、礫の直上には目地に入り込む薄い租砂層があり、その上に粘質砂質土がのる。一方、北半は小ぶりの礫が多く、北部ほど密になり、礫上面は青灰色粘質土で覆われる。南北の礫の境界を示す見切り石などは確認されなかった。南側の堆積土の様子より、常に水が流れていた状況が推測され、池尻などに相当する池の遺構と考えられる。遺物より、大乘院が移転する以前、禅定院時代に作られた庭園遺構である可能性が高い。

礫層SX8589 調査区北辺で確認した厚さ約40cmの礫層。礫敷SX8587のベースとなる黄褐色粘質土の下層に存在し、当初地山起源の自然堆積層と思われたが、園池の構造および変遷にかかわるため、数箇所掘り下げ精査した。その結果、1)遺物を包含しない、2)礫層の下層に数cm大の礫を含む砂礫層が存在する、3)南、東側への広がり確認されないが、西および北側に広がる、4)同様の礫層が周辺で数箇所確認されている、以上4点を確認した。これらの事実より、礫層が自然堆積であると考えられるが、園池に先行する遺構の崩落などによって形成されたものである可能性を残す。(大林 潤)

5 出土遺物

瓦磚類

第374次調査で出土した瓦磚類(表22)は、古代から近世まで幅広い時期に属するが、なかでも近世に位置づけられるものが大半をしめる。

軒瓦では、四重弧文軒平瓦が南区池岸整地土層から出土した(図161)。顎の長さ6.8cm、深さ1.0cm。文様は深く弧線の上面は丸味を帯びる。胎土に白色粒を多く含み、硬質な焼きで灰色を呈する。第310次調査で出土した四重弧文軒平瓦も同様の特徴をもつ。なお、これらの瓦は飛鳥池遺跡出土の四重弧文軒平瓦Ⅱ型式A2に酷似することが注目される。

丸瓦・平瓦では、「瓦佐」の刻印をもつものが1点ずつ出土した。興福寺菩提院大御堂の平瓦にも同様の刻印がみられ、かつ、安政3年(1856)の紀年銘を持つ。

道具瓦は11種類に及び、バラエティーに富む。棟の端部に葺かれる獅子口が、これまでの大乘院庭園の調査の

表22 第374次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		軒棧瓦	
型式	点数	型式	点数	型式	点数
平安	1	四重弧文	1	江戸	1
興153(鎌倉)	1	興730(平安)	2	江戸後半	3
興280(江戸)	13	興866(室町後半)	1	軒棧瓦計	4
興285(室町後半)	5	興919(室町)	1	道具瓦	
興352(室町後半)	1	剣頭文(鎌倉)	2	鬼瓦	11
興409(室町後半)	1	連珠文(鎌倉)	2	面戸瓦	11
室町巴	3	室町	1	獅子口(銘付2点含)	12
室町後半巴	14	室町後半	7	鳥袞	3
江戸前半巴	1	中世	4	鬘斗瓦	15
江戸巴	37	江戸前半	1	箱鬘斗瓦	1
巴	9	江戸後半	1	割鬘斗瓦(刺印付1点含)	41
隅巴(江戸)	1	江戸	53	隅切平瓦	1
室町後半菊丸	9	小型	7	刻印付丸瓦	1
江戸菊丸	36	型式不明	10	刻印付平瓦	1
菊丸	7	隅切	1	刻印付煉瓦	6
江戸小型菊丸	5			角棧伏間瓦	41
菊丸	8			水切瓦	5
江戸	1			輪違い	14
型式不明	24			土管(完形)	21
軒丸瓦計	177	軒平瓦計	94	道具瓦(刺印付1点含)	16
丸瓦		平瓦		用途不明	9
重量	212.6kg	平瓦	907.1kg	石塔	
重量		磚(煉瓦含)	37.7kg	石塔	6.52kg
点数	1653点	磚	44点	石塔	1点
				道具瓦計	209



図161 第374次出土瓦磚類 1:3

中で最も多い12点出土したことが注目される。その中には「源□」「□□〔仕カ〕」の刻銘をもつものがある。

煉瓦は、「×」「★」の刻印をもつ赤煉瓦のほか、「MADE IN HIROSE」の刻印をもつ耐火煉瓦が出土した。いずれも表面には長辺方向に条線が走り、手抜き成形されたものと考えられる。「×」印煉瓦は、岸和田煉瓦株式会社(明治26年創業)の製品である。「★」「MADE IN HIROSE」印煉瓦の製造元は特定できないが、前者は大坂城址や住友銅吹所跡でも出土している。以上の資料はすべて、大正14年(1925)に定められたJES規格の法量に合わないため、それ以前の製品である可能性が高い。

(中川あや)

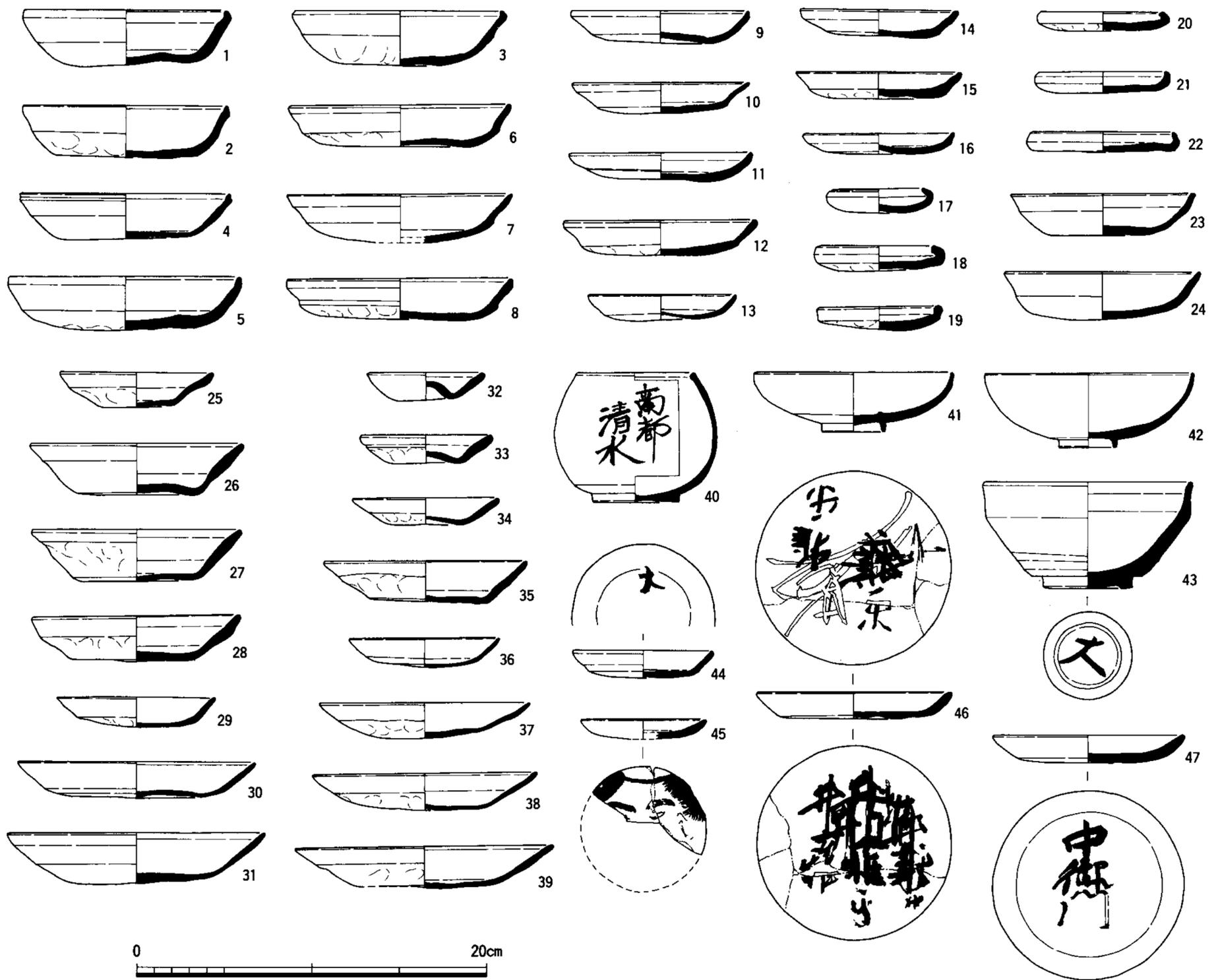


図162 第374次調査出土土器・陶磁器類 1 : 4

その他の遺物

ここでは、西小池の堆積土出土遺物、埋立て後の各層出土遺物の概略を述べ、多量の遺物が出土した水槽SX8838についてはまとめて紹介する。

池内の遺物 木製品には、柿茸に用いたと考えられる板材等がある。柿は完形にちかいもので長さ28.2cm、幅9.9cm。長さ1.2cm、太さ1.5mmの木(竹)釘を1枚あたり2本うつ。

金属製品には、真鍮製の延べ煙管、銅製の弓金具(把手金具か)、環、鉄製の小刀がある。延べ煙管は雁首から吸口にかけてを一体で製作したもので、火皿を欠く。現存長10.9cm、胴の断面は楕円形を呈し幅1.0cm、厚さ6mm。胴の表面に赤色の漆(顔料はベンガラ)で山形文を描く。

池の埋立て以後の遺物 池の埋立土である青灰色砂質土

・黄褐色砂質土層上面から、白色粘土層にかけての整地層、および西小池西岸の各面にともなう井戸SE8837、埋甕遺構SX8791、南北溝SD8798および土管掘形内から出土した遺物のうち、特徴的なものは石製品で、硯5点、石筆49点、石盤片がある。硯には裏面に「本高嶋青石」と針書きされたものが1点ある。

また、白色粘土層にともなって多量の漆喰片、タイルが出土した。タイルには裏面に「奈良」と墨書されたものがある。

水槽SX8838出土遺物 水槽内の掘削中に多量の遺物が確認されたため、内部の土壌を持ち帰り、水洗選別をおこなった。その結果、折れた鉛筆芯やビーズ(ガラス小玉)など微細な遺物も採取した。また、水槽内であったことから植物質資料をはじめ、皮・布製品の遺存状態も良好

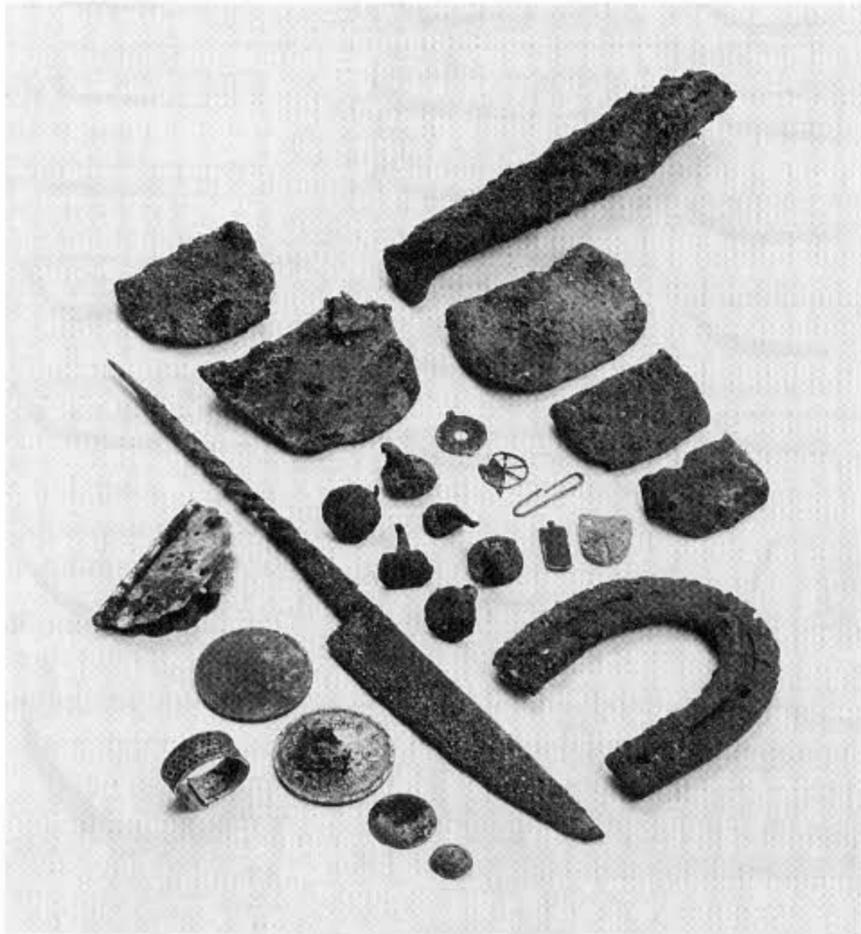


図163 SX8838出土金属製品・銭貨

であった。出土遺物は、木・竹製品、金属製品、銭貨、石製品、土製品、ガラス製品、貝製品、自然遺物など多岐にわたるが、陶磁器類はごくわずかである。

木製品には、将棋駒、鉛筆、算盤玉、石盤の枠木、横櫛、糸巻き、編針、円盤状木製品、多数の部材片等がある。将棋の駒は、五角形を呈し「角行」と読めるものなどが20点ちかくあるが、そのなかに裏面を削ったもの、断面の不整形なものがあり、これらには「少佐」「中尉」などと記されたものが含まれている。駒を加工し、行軍（軍人）将棋に用いたものであろう。行軍将棋は詰め将棋をもとにして、日清・日露戦争に影響をうけて考案されたものである。鉛筆は4点出土。いずれも軸が丸く、芯の断面も丸い。このうち2点に刻印がみえ、「□CASH No.2 MADE IN GERMANY」（MADE以下は2段）、左寄せで「BBB Rigold & Bergmann」（下線部筆記体）とある。前者に「小野」と刻まれている。所有者を示すものであろうか。算盤玉は6点出土。径は0.8～1.8cm。

金属製品（図163）には、鉄製品に蹄鉄、板状品、ナイフ、鋏、釘、瓶などの蓋、ドアの蝶番、雨樋用かと思われる径5cmほどの管などがある。蹄鉄は、長さ5.9cm、幅5.6cm。通常のもの4分の1ほどのきわめて小さいものである。1点出土。板状品は、長さ5.6～2.8cm、幅3.7～1.8cmの舌状の鉄板の両端を折り曲げたもので、22点

出土。東京都西新宿三丁目遺跡では、幕末から明治初頭の遺構を中心に42点が出土し、江戸市中よりも江戸近郊の農村での出土が多いこと、古墳時代の方形鍬・鋤先に形態が似ることなどが指摘されている（東京オペラシティ建設用地内埋蔵文化財調査団『西新宿三丁目遺跡』1993年）。この他に、鉛面子、メッキを施した指ぬき、蝶番、ボタン状品などがある。鉛面子は、径2.2cm、厚さ1mm程の円盤形のものが1点。文様は摩滅して不明。

銭貨には、寛永通宝5点、明治10年鑄造の一銭銅貨2点がある。寛永通宝の一部は碎片である。

石製品には、硯2点、石盤片、石筆113点、碁石（黒）1点がある。多量の石筆のなかに径9mmの太型品もある。

土製品には、梅花などを型抜きしたものが6点ある。長さ2.4cm以下の小さなもの。背面は平坦か凸面になる。泥面子の一種で、おはじきなどに用いたものであろうか。瓦転用品には、転用円盤と砥石がある。前者は平面形が正円にちかく、側面を研磨したもので7点。後者は不整形で曲面をなす研磨面をもつもので5点。前者については、第336次調査で「びんちゃん」と墨書したものが出土し、遊具と考えたが、同様に石蹴りあるいはお手玉の道具と考えておきたい（宮崎貴夫「円盤状陶磁製品」『風呂川遺跡』西有家町教育委員会、1982年）。

ガラス製品には、ガラス瓶、びん玉6点、ビーズ（ガラス小玉）4点がある。

貝製品には、ハマグリ製の碁石（白）4点とばい独楽1点がある。ばい独楽は、バイガイの殻口部をおとし、螺塔部を利用したもので、断面を水平に研磨する。砂・鉛などをいれておもりとし、蠟で口をふさいだ。明治30年代頃に現在のような鉛、鉄製の「べいごま」に変わる以前のもの。出土例は、兵庫県伊丹郷町、明石城にある。他の貝殻には、ハマグリ、カキ類、サルボウ、ハイガイなどがある。

この他、消しゴムなどのゴム製品、布・皮製品、人の歯、樹脂製のボタン、多量の種子などが出土した。

以上の遺物を用途別に区分すると、文房具、遊戯具、服飾・裁縫具、生活残滓などとなる。なかでも種類・量ともに豊富な文房具類（図164）と、遊戯具類（図165）は、飛鳥小学校との関係をうかがわせる資料である。

SX8838は、井戸SE8837と接続していることから、常時開口していて汚水が入るようなありかたは考えにく

く、これらの遺物は水槽として廃絶された後の堆積物であろう。明治33年の飛鳥小学校移転にともなう塵芥である可能性が高い。このことは、遺物個々の年代観や組成からもうかがい知ることができる。

鉛筆・消しゴムの出土も、石盤・石筆の時代から、ノート・鉛筆の時代への過渡的なありかたを示している。また、碁石や行軍将棋の駒、泥面子と鉛面子、びー玉、石蹴り用の瓦製円盤やバイガイを加工した独楽など、明治中頃の児童遊戯を物質文化から検討する材料がえられたことになる。これらに加えて、服飾・裁縫等にかかわる遺物が意外と多く含まれていることも、SX8838出土遺物の特徴である。 (次山 淳)

6 まとめ

西小池の全体像 調査の結果、西小池中央部は、複雑に入り組んだ汀線を持ち、中島や岩島を伴った変化のある景観を呈していたことを確認した。今回の調査で、西小池は西南の一部を残してほぼ完掘したこととなり、その全体像がより具体的に明らかになった。西小池は、3つの形の異なる池をつなげた形状で、全体は、最大で南北約

60m、東西約30mである。岸には護岸石をめぐらせ、大小3つの中島や、岬、州浜、岩島などによって構成され、池底には埋甕や魚溜りが設けられていた。これまでの調査で、西小池の平面形状は、『興福寺旧大乘院庭苑図』（『風景』第6巻第3号掲載）に描かれた形状とほぼ相違ないことが推測されていたが、構成要素の詳細や、池底で検出した遺構など、絵図からは読み取れない重要な情報を得ることができた。また、既に確認されている東大池と比較すると、規模、構成要素、造成状況などが大きく異なり、両池は異なる空間を作り出していたと考えられる。

禅定院時代の遺構の存在 南北両区において、12世紀前半に遡る遺構の存在を確認した。北区では、西小池西岸の整地土の下層に、瓦器片を含む暗灰色土層および、溝の遺構を検出した。また、南区では第365次調査で検出した礫敷面の時期が判明した。禅定院は、隆禅によって永久年中に伽藍の整備がおこなわれており、今回検出した12世紀前半の遺構は、この時の造営に関わる可能性が高い。特に、南区検出の礫敷遺構は、禅定院時代の園池の存在を証明するものであり、今後の発掘調査による禅定院伽藍の解明が期待される。 (大林)



図164 SX8838出土文房具類



図165 SX8838出土遊戯具類